

# 過去の達成経験が大学生のキャリア選択 自己効力感および結果期待に及ぼす影響

## The Effects of Past Accomplishment experiences on Career Choice Self-Efficacy and Career Outcome Expectations of Undergraduate Students.

秋山史子

### 問題と目的

キャリア選択自己効力感および結果期待が積極的な就職活動を促し、職業未決定を抑制することが多くの研究で明らかになっている。しかし、富永（2008）が指摘するように、この自己効力感と結果期待に寄与する先行要因の検討はほとんど進んでいない。

秋山（印刷中 a）は、キャリア選択自己効力感と結果期待に寄与する要因として、大学受験経験を取り上げ、大学1～3年生を対象にこれらの関連を一時点調査によって検討している。大学受験経験とは、大学入試に向けた受験勉強期間や受験結果について大学入学後の現在認識している経験のことであり、「大学受験の努力経験」、「大学受験期不安経験」、そして「大学受験結果の不満足度」から構成されている。重回帰分析の結果、「大学受験の努力経験」がキャリア選択自己効力感に正の関連があること、一方、「大学受験期不安経験」は負の関連があることを明らかにした。この研究は大学入学前の大学受験経験がキャリア選択自己効力感と結果期待の形成に関連していることを実証した点では意義深いものである。しかしな

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）  
がら、重要ではあるもののたった1つの経験である大学入学前の大学受験経験が大学入学後の就職活動への動機づけを形成するという結論には課題もある。なぜなら、大学生は大学入学後も様々な経験によって、自己効力感の形成の資源となる遂行達成経験の情報を獲得し続けることが考えられるためである。加えて、この研究では一時点調査のため変数間の影響関係や因果関係には言及できないことが指摘されている。大学受験が就職活動に及ぼす影響をより明確にするためには、複数年にわたる経時的な調査の実施が必要であろう。

川瀬（2017）は、大学生を対象にキャリア選択自己効力感の向上要因を縦断調査によって検討した。1年後の調査でキャリア選択自己効力感が向上した学生や1回目調査から引き続き高い自己効力感を維持していた学生は、大学での学習や部活動・サークル活動など大学内での活動、アルバイトやボランティア活動、地域活動など大学外の活動に積極的に取り組み、成功した経験を得ていたことが見出されている。秋山（印刷中b）も同様に、大学生142名を対象に、大学受験経験に加え大学での学習経験とアルバイト経験を取り上げ、3つの経験とキャリア選択自己効力感および結果期待の関連を検討した。その結果、「大学受験の努力効用経験」、大学での「学習の努力成功経験」および「アルバイトの努力成功経験」がキャリア選択自己効力感と結果期待にポジティブに関連していることが確認された。

これらの研究のように大学生が大学内外で経験している多様な活動を取り上げ、キャリア選択自己効力感への影響を検討している研究は散見されるものの、知見の蓄積という観点からは未だ不十分であろう。そのため、本研究では、現在の大学生が実際にどのような活動領域で努力し、やり遂げた経験があるのか整理した上で、項目を作成し、それぞれの活動での経験とキャリア選択自己効力感、結果期待との関連を検討する。

本研究の目的は大学受験経験がキャリア選択自己効力感と結果期待に及ぼす影響を複数年にわたる調査によって検討することである。大学生が大学入学後に努力してやり遂げたと感じている経験や達成感が得られた経験

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）  
はどのような活動であるか整理し、それらの活動の経験とキャリア選択自己効力感、結果期待の関連もあわせて検討する。

## 方法

### 調査参加者

3回の調査すべてに回答した69名の回答を対象とした。回答者はすべて1回目調査時に大学1年生であった。回答者の属性は、女性54名、男性15名、現在通っている大学で利用した入試形態は、一般入試45名、系列高校からの進学6名、指定校推薦18名であった。69名全員が同じ学科に所属していた。

### 調査時期と手続き

1回目の調査を2017年5月、2回目調査を2018年4月、そして、3回目調査を2019年5月に関東圏内の私立大学1校において、授業後に質問紙を一斉配布する形式で実施した。1回の調査にかかった時間は15分程度であった。

### 倫理的配慮

すべての調査回において、調査に先立ち質問紙への回答は任意であること、当該授業の内容や成績評価とは一切無関係であること、回答内容や回答識別IDは個人を特定しない形で統計的に処理されることを口頭で説明し、質問紙にも記載した。その上で回答への協力に了承した者から回答を得た。

### 使用尺度

**1回目調査** 秋山（印刷中 a）の大学受験経験尺度を項目内容の表現を一部修正し、項目を加筆した18項目を用いた（Table 1）。回答は5段階

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

評定（5=あてはまる～1=あてはまらない）であった。そして、3年間のデータ照合に用いるIDと学年、性別、現在通っている大学の入学試験で利用した入試形態を尋ねた。

**2回目調査** データ照合用のIDと学年、性別を尋ねた。そして、大学生になってから現在までに経験した達成感があった経験について、自由記述で回答するよう求めた。その際、大学の中で経験したことだけではなく、アルバイト先やボランティア先など大学外で経験したことも対象である旨を教示した。

**3回目調査** データ照合用のID、学年、性別を尋ねたのち、大学生生活経験尺度への回答を求めた。大学生生活経験尺度は、2回目調査の自由記述の回答をもとに抽出された4つの各活動内容について、大学受験経験尺度を参考にそれぞれ11項目ずつ計44項目を作成したものである（Appendix1）。回答は「5=あてはまる～1=あてはまらない」の5段階評定であった。

キャリア選択自己効力感尺度の測定には、キャリア選択自己効力感尺度（花井、2008；Career Choice Self-Efficacy Scale）25項目を使用した。回答は4段階評定（4=自信がある～1=自信がない）であった。この尺度は「自己評価」、「目標選択」、「計画立案」、「情報収集」、「意思決定の主体性度」の5因子から成る。各下位尺度の信頼性係数を確認したところ $\alpha=.87\sim.91$ と十分な値であったため、この5因子構造を採用し、各下位尺度の平均値を分析に用いた。

最後に、キャリア選択結果期待を測定する尺度として、Betz, & Vuyten (1997) を邦訳した安達 (2001) の進路選択に対する結果期待尺度4項目 ( $\alpha=.86$ ) を使用した。回答は5段階評定（5=あてはまる～1=あてはまらない）であった。以降の分析では、全4項目の平均値を尺度得点として用いた。

## 結果

### 1 回目調査データの分析

**大学受験経験尺度の探索的因子分析** 最初に、大学受験経験尺度について探索的因子分析を実施した。天井効果が確認された3項目を除外した15項目を対象に最尤法による分析を行った。固有値の減衰状況（5.23、2.53、1.90、1.09…）と因子の解釈可能性から3因子構造を採用しプロマックス回転を行った。最終的に、因子内容の解釈可能性から1項目を除外し、3因子14項目が得られた（Table 1）。第1因子を「大学受験の努力経験（以下、努力経験）」（ $\alpha=.89$ ）、第2因子を「大学受験結果の不満足度（以下、結果の不満足度）」（ $\alpha=.84$ ）、そして、第3因子を「大学受験期不安経験（以下、受験期不安）」（ $\alpha=.70$ ）、と命名した。以降の分析では各下位尺度の平均値を用いた。その際、「結果の不満足度」には逆転項目2項目を含むため、得点が高いほど不満足度が高くなるよう逆転項目の処理を行って算出した。

### 2 回目調査データの分析

**自由記述回答の整理** 69名の参加者のうち32名から回答を得た。複数の活動について記述していた回答は、活動内容が異なる場合はそれぞれを1件とし、同種の活動の中で複数の記述の場合はまとめて1件とした。Table 2は、記述内容を活動の種類別に整理したものである。その結果、「アルバイト」や「バイト」という単語が含まれる記述が15件、「サークル」や「部活」を含む記述が13件、「授業」、「成績」、「単位」など大学での学習に関連する内容の記述が10件、そして、習い事やボランティア、趣味など大学外での活動についての記述が3件であった。よって、大学生生活において「アルバイト」、「部活動・サークル活動」、「学習」、「大学外での活動」の4つの活動それぞれ、もしくは複数の活動にわたって、大学生

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

Table 1 大学受験経験尺度の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	M	SD
<b>大学受験の努力経験</b>					
12. 大学に入るために、私は一生懸命勉強していた。	.89	.07	-.05	3.77	1.13
17. これからの人生で困難な課題に直面したとしても、大学受験で得た経験を生かせると思う。	.83	.03	-.02	3.14	1.21
10. 大学受験に必要な科目だったので、苦手科目も一生懸命取り組んだ。	.79	-.19	.06	3.52	1.23
3. 大学受験であれだけ一生懸命取り組んだのだから、これから直面する課題も乗り越えられるだろう。	.68	-.03	-.12	2.86	1.07
5. 大学受験に向けて、自分の得意な分野、苦手な分野が何なのかを分析して勉強に取り組んだ。	.63	-.12	.02	3.67	1.04
14. 大学受験で第一志望に合格するためなら、どんな困難にも立ち向かった。	.63	-.02	-.03	2.91	1.03
9. 大学に合格したのは、最後まで諦めずに勉強を頑張ったからだ。	.60	.31	.12	3.36	1.12
<b>大学受験結果の不満程度</b>					
4. 思い返してみると、大学受験はうまくいかなかった。	.05	-.83	.09	2.56	1.28
13. 一生懸命勉強していたにも関わらず、大学受験の結果は思わしくなかった。	.40	-.81	.04	2.45	1.11
1. 今から振り返ると、大学受験の結果は満足したものだった。	.15	.76	.15	3.50	1.27
7. 十分に受験勉強をしていたので、大学受験に成功した。	.36	.62	-.07	2.82	1.07
<b>大学受験期不安経験</b>					
11. 受験勉強に取り組むことを考えると、よく憂うつになっていた。	-.06	.05	.95	3.55	1.35
6. 受験勉強をしている間は落ち着かないことが多かった。	.12	-.15	.55	3.58	1.23
18. 大学に合格できないのではないかと考えると不安になって、何も手につかなかった。	-.11	.05	.49	2.55	1.29
因子間相関					
	F2	.27	—		
	F3	-.01	-.08		

は注力していることが示された。3回目調査で用いる大学生生活経験尺度は、この結果を踏まえ、これら4つの活動領域それぞれについて項目を作成することとした。

### 3回目調査データの分析

**大学生生活経験尺度の分析** はじめに、44項目を対象に天井効果と床効果を確認したところ、それぞれ3項目ずつ計6項目が確認された。よって、以降の分析では、これら6項目を除外した。本研究では尺度構成を確認するにあたって、各活動の11項目を対象に主成分分析によって因子構成を確認した。採用した項目内容はすべて Appendix 1 に示した。

各活動（学習9項目、部活動・サークル活動8項目、アルバイト10項

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

Table 2 自由記述解答の分類

活動内容	記述数	記述内容（一部）
アルバイト	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 塾講師のアルバイトで生徒を第1志望に合格させてあげられたこと</li> <li>・ アルバイト先で売上目標が達成できたとき</li> <li>・ アルバイト（塾講師）で生徒が心を開いてくれたこと</li> <li>・ アルバイトでほめられたこと。アルバイト先で月間MVPを獲ったこと。</li> <li>・ アルバイト先でほめられた。必要とされる人材に少しでもなれたのだなと感じた。</li> <li>・ バイトで昇給</li> <li>・ バイトで大変なお客の接客をした後に他のお客さんがたくさんねぎらってくれた時</li> </ul>
部活動・サークル活動	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ サークルの活動で上手く自分のやりたかったことが出来た時</li> <li>・ サークルの合宿で賞を取ったこと。</li> <li>・ サークル内で重役につき、イベントや新歓などを率先してやり遂げたこと。</li> <li>・ 学祭でのサークルでの演奏。最初は少ししかできなかったドラムがたたけるようになった。</li> <li>・ 弓道部で上手くなったと感じた時</li> <li>・ 部活で新しい技ができるようになった時</li> </ul>
学習	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ レポートをなんとか書き上げたこと</li> <li>・ 勉強した科目で良い点を取ることができた。</li> <li>・ フル単したこと。</li> <li>・ 授業の予習をきちんとしていたので、スラスラと訳すことができ、良い訳だと言われた。</li> <li>・ 大学の成績が予想以上によかったこと。</li> </ul>
大学外の活動	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ピアノの発表会で成功したこと</li> <li>・ 子どもと関わるボランティア活動</li> </ul>

目、大学外の活動 11 項目）別に主成分分析を実施したところ、いずれも複数の主成分が得られたものの、第 1 主成分以外は構成する項目数が非常に少なく、信頼性係数が低かった。そのため、4 つの活動すべてにおいて第 1 主成分を構成する項目群を対象に項目内容の解釈可能性や信頼性分析の結果から、学習 5 項目、部活動・サークル活動 5 項目、アルバイト 6 項目、大学外の活動 8 項目を最終的に採用した。これらの第 1 主成分はすべて活動に対して積極的に取り組み、よい評価を得た経験を含んでいたため、各活動の「努力成功経験」と命名した。各活動別に信頼性係数を算出したところ、「学習の努力成功経験（以下、学習経験と略す）」 $\alpha = .81$ 、「部活動・サークル活動の努力成功経験（以下、部活経験）」は  $\alpha = .95$ 、「アルバイトの努力成功経験（以下、アルバイト経験）」 $\alpha = .88$ 、「大学外の努力成功経験（以下、大学外の経験）」が  $\alpha = .90$  と、どの活動の項目群も十分な信頼性があると判断した。

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

以降の分析では、各活動それぞれの項目の平均値を尺度得点とした。「学習経験」、「アルバイト経験」、「大学外の経験」には逆転項目が含まれていたため、得点が高いほど各活動に対して熱心に取り組み、成功を収めたことをあたわすよう、それぞれ逆転項目処理を行った。

### 各変数間の相関

1回目調査の大学受験経験、3回目調査で得られた大学生生活経験、そして、キャリア選択自己効力感および結果期待の平均値、標準偏差と尺度間の相関係数を Table 3 に示す。1回目調査時点の大学受験経験と3回目調査時点の大学生生活経験の相関を見ると、「努力経験」が「部活経験」（ $r=.45, p<.001$ ）、「アルバイト経験」（ $r=.27, p<.05$ ）と正の有意な相関を示した。「受験期不安」は大学生生活経験とはほぼ無相関であったが、「結果の不満足度」は「アルバイト経験」と有意傾向の正の相関を示している（ $r=.22, p<.10$ ）。大学受験経験とキャリア選択自己効力感では「努力経験」が「自己評価」（ $r=.25, p<.05$ ）、「計画立案」（ $r=.27, p<.05$ ）と正の相関、「受験期不安」が「計画立案」（ $r=-.32, p<.01$ ）、「意思決定の主体性度」（ $r=-.27, p<.05$ ）と負の相関を示した。「受験期不安」はキャリア選択結果期待とも有意な負の相関が示されている（ $r=-.24, p<.05$ ）。

大学生生活経験のうち「学習経験」は「目標選択」と負の相関（ $r=-.31, p<.05$ ）を示すなど、自己効力感の下位尺度や結果期待と負の関連の傾向が見られたが、「計画立案」とのみ  $r=.23$ （ $p<.10$ ）の有意傾向の正の相関が示されている。「アルバイト経験」は「目標選択」（ $r=.24, p<.05$ ）、「情報収集」（ $r=.31, p<.01$ ）、「意思決定の主体性度」（ $r=.39, p<.01$ ）とそれぞれ正の相関を示し、キャリア選択結果期待とも正の相関を示した（ $r=.37, p<.01$ ）。「大学外の経験」も同じく「目標選択」（ $r=.28, p<.01$ ）、「情報収集」（ $r=.26, p<.05$ ）、「意思決定の主体性度」（ $r=.31, p<.05$ ）と有意な正の相関が得られた。「部活経験」は「意思決定の主体



過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

Table 3 各尺度得点の平均値，標準偏差および相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 努力経験	3.36	0.87	—	-.04	-.16	.14	.45***	.27*	.22	.25*	.01	.27*	.15	.23	.14
2 受験期不安	3.23	1.01		—	.10	-.10	-.06	.01	.03	-.04	-.02	-.32**	.01	-.27*	-.24*
3 結果の不満足度	2.73	1.01			—	-.13	.08	.22	-.03	-.02	.03	-.09	.07	.09	-.04
4 学習経験	3.40	0.67				—	.00	-.06	.17	-.20	-.31*	.23	-.12	.02	-.09
5 部活経験	3.10	1.36					—	.17	.11	.02	.08	.13	-.05	.20	.12
6 アルバイト経験	3.64	0.84						—	.08	.15	.24*	.21	.31**	.39**	.37**
7 大学外の経験	2.73	0.84							—	.16	.28*	.17	.26*	.31**	.15
8 自己評価	2.95	0.59								—	.53***	.36**	.58***	.28*	.16
9 目標選択	2.38	0.73									—	.30*	.59***	.47***	.31**
10 計画立案	2.27	0.74										—	.45***	.52***	.20
11 情報収集	2.86	0.58											—	.51***	.28*
12 意思決定の主体性度	2.79	0.69												—	.45***
13 キャリア選択結果期待	4.08	0.72													—

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

性度」とのみ有意傾向の正の相関が示されたが ( $r = .20$ ,  $p < .10$ ) 他の下位尺度とはほとんど相関が得られなかった。

キャリア選択自己効力感と結果期待の相関をみると、「目標選択」( $r = .31$ ,  $p < .01$ )、「情報収集」( $r = .28$ ,  $p < .05$ )、「意思決定の主体性度」( $r = .45$ ,  $p < .001$ ) がそれぞれ結果期待と有意な正の相関を示した。

以上のように、大学受験経験の「努力経験」、「アルバイト経験」と「大学外の経験」がキャリア選択自己効力感、結果期待とポジティブな関連を、「学習経験」のみ負の関連を示した。

### 階層的重回帰分析

キャリア選択自己効力感の下位尺度、キャリア選択結果期待をそれぞれ目的変数、大学受験経験、大学生生活経験を説明変数とした階層的重回帰分析を実施した。Step 1にはプロフィール変数（性別と入試形態）、Step 2に大学受験経験、Step 3に大学生生活経験を投入した。分析の結果を Table 4に示す。

Step 2で分散説明率の増分が有意だったのは、「計画立案」( $\Delta R^2 = .17$ ,  $p < .01$ )と「意思決定の主体性度」( $\Delta R^2 = .14$ ,  $p < .05$ )であった。「計画立案」に関しては「努力経験」が正の関連 ( $B = .25$ ,  $SE = .11$ ,  $\beta = .29$ ,  $p$

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

Table 4 重層的重回帰分析の結果

	キャリア選択自己効力感														
	自己評価					目標選択					計画立案				
	$AR^2$	$\Delta F$	$B$	$SE$	$\beta$	$AR^2$	$\Delta F$	$B$	$SE$	$\beta$	$AR^2$	$\Delta F$	$B$	$SE$	$\beta$
Step 1 プロフィール項目															
性別			-.38	.18	-.26*			-.35	.22	-.19			-.34	.23	-.19
一般入試			-.03	.17	-.02			-.09	.21	-.06			-.08	.22	-.05
系列校進学	.12	2.76*	-.54	.28	-.26	.05	1.00	-.34	.35	-.13	.04	.83	-.25	.36	-.09
Step 2 大学受験経験															
努力経験			.19	.09	.27*			.01	.12	.01			.25	.11	.29*
受験期不安			-.01	.07	-.02			-.01	.10	-.01			-.22	.09	-.30*
結果の満足度	.06	1.51	.05	.08	.08	.00	0.06	.04	.11	.06	.17	4.22**	.03	.10	.04
Step 3 大学生生活経験															
学習経験			-.24	.10	-.27*			-.39	.12	-.35**			.18	.13	.16
部活経験			-.11	.06	-.24			.01	.07	.02			-.03	.07	-.05
アルバイト経験			.03	.09	.04			.22	.11	.26*			.15	.11	.17
大学外の経験	.13	2.57*	.14	.08	.19	.28	5.89***	.33	.10	.38***	.06	1.21	.10	.11	.11

	キャリア選択自己効力感														
	情報収集					意思決定の主体性度					キャリア選択結果期待				
	$AR^2$	$\Delta F$	$B$	$SE$	$\beta$	$AR^2$	$\Delta F$	$B$	$SE$	$\beta$	$AR^2$	$\Delta F$	$B$	$SE$	$\beta$
Step 1 プロフィール項目															
性別			-.30	.17	-.21			-.23	.21	-.14			-.10	.22	-.06
一般入試			.02	.17	.02			.03	.20	.02			-.09	.21	-.06
系列校進学	.08	1.87	-.41	.28	-.20	.03	.70	.27	.34	.11	.01	.12	-.09	.35	-.03
Step 2 大学受験経験															
努力経験			.11	.09	.15			.26	.11	.32*			.16	.11	.19
受験期不安			.01	.08	.02			-.16	.09	-.23			-.18	.09	-.26
結果の満足度	.02	0.55	.07	.08	.11	.14	3.51*	.14	.09	.19	.10	2.12	.07	.10	.10
Step 3 大学生生活経験															
学習経験			-.14	.10	-.16			-.04	.12	-.04			-.13	.13	-.12
部活経験			-.10	.06	-.23			.03	.07	.05			.02	.07	.03
アルバイト経験			.20	.09	.29*			.27	.10	.33**			.32	.11	.38**
大学外の経験	.21	4.29**	.21	.08	.31*	.16	3.29*	.23	.09	.28*	.15	2.83*	.15	.10	.17

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

注記) 性別: 0=男性, 1=女性

<.05)、「受験期不安」が負の関連 ( $B = -.22$ ,  $SE = .09$ ,  $\beta = -.30$ ,  $p < .05$ ) を示した。「意思決定の主体性度」には「努力経験」の正の関連が示されたが ( $B = .26$ ,  $SE = .11$ ,  $\beta = .32$ ,  $p < .05$ )、Step 2 の回帰モデルは有意傾向であった。

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

Step 3 では、「自己評価」( $\Delta R^2=.13, p<.05$ )、「目標選択」( $\Delta R^2=.28, p<.001$ )、「情報収集」( $\Delta R^2=.21, p<.01$ )、「意思決定の主体性度」( $\Delta R^2=.16, p<.05$ )そして、キャリア選択結果期待 ( $\Delta R^2=.15, p<.05$ ) において分散説明率の増分が有意であった。

「自己評価」では「学習経験」が負の関連が得られ ( $B=-.24, SE=.10, \beta=-.27, p<.05$ )、「目標選択」でも「学習経験」は負の関連 ( $B=-.39, SE=.12, \beta=-.35, p<.01$ ) を示した。一方「目標選択」には「アルバイト経験」と「大学外の経験」が正の関連を示している（それぞれ、 $B=.22, SE=.11, \beta=.26, p<.05$ 、 $B=.33, SE=.10, \beta=.38, p<.001$ ）。「情報収集」では「アルバイト経験」( $B=.20, SE=.09, \beta=.29, p<.05$ )と「大学外の経験」が正の関連 ( $B=.21, SE=.08, \beta=.31, p<.05$ )、「意思決定の主体性度」でも同じく「アルバイト経験」( $B=.27, SE=.10, \beta=.33, p<.01$ )と「大学外の経験」( $B=.23, SE=.09, \beta=.28, p<.05$ )が正の関連があることが示されている。キャリア選択結果期待へは「アルバイト」のみ有意な正の関連が得られている ( $B=.32, SE=.11, \beta=.38, p<.01$ )。

これらの分析結果から、大学受験経験は「計画立案」、「意思決定の主体性度」の自己効力感に対して有意な関連を示し、大学生活経験は「計画立案」以外のキャリア選択自己効力感の下位因子および結果期待と関連があることがわかった。

## 考察

本研究の目的は、入学直後に測定した大学受験経験の評価と大学3年生時に測定した大学生活における遂行達成経験が大学3年生時のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響を検討することであった。

秋山（印刷中 a、印刷中 b）の一時点調査での結果と同様に、大学入学前に経験した大学受験での経験が3年後の就職活動にも影響していることを調査によって明らかにすることができた。特に、就職活動でも必要とな

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

る、計画を立てたり志望先に就職するために諦めず粘り強く取り組んだりする行動は、大学受験に向けた過程での努力した経験が時間を経てもなお活かされていることを表している。一方、「受験期不安」が負の影響を示した点には注意を要する。就職活動の開始に際して、過去の大学受験時で経験したネガティブな情動経験を想起してしまい、将来の行動の生起を妨げる怖れがあるためである。そのため、教員や支援者は不安を和らげるようなサポートを行う必要があるだろう。

さらに本研究では、大学生活の中で達成感を感じた活動が大きく4種類あることを示し、その4つの活動のうち「学習経験」、「アルバイト経験」、そして「大学外での経験」とキャリア選択自己効力感、結果期待に関連があることを明らかにした、この3つの活動の中で、アルバイトや大学外での活動、は、多くの場合、学生自らが選択、決定し、従事している活動である。就職活動の支援やキャリア教育プログラムにおいても、大学の外の広い世界の中で学生が自主的に選択、決定した活動に熱心に取り組んでみることを促したり、目を向けさせたりすることで、自己効力感や結果期待の向上ひいては積極的な就職活動に繋がると考えられる。

一方、「学習経験」は「自己評価」、「目標選択」の自己効力感と負の関連を示し、秋山（印刷中b）と異なる結果が得られた。「自己評価」や「目標選択」が示す行動は、自分の適性や将来への目標を明確にすることを意味している。普段から授業や課題に熱心に取り組み、成績も良い学生は、他の学生よりも早くこれらの行動の重要性を認識し、就職活動が本格化する前には、これらの難しさを感じ、自身の能力への不信に繋がっていたのかもしれない。川瀬（2016）もまた、ゼミナールへの取り組みなど学習の経験の効果が一時点調査と縦断調査で正負が異なっていたと報告し、今後さらなる検討の必要性に言及している。大学生の本分は学業であることを鑑みると、「学習経験」の効果の検討を積み重ねていくことが今後も重要となるだろう。

本研究は3年にわたる経時的な調査であったことから、同じ大学、学科

過去の達成経験が大学生のキャリア選択自己効力感および結果期待に及ぼす影響（秋山）

に通う学生のみを対象に実施し、最終的な参加者数も限られた数となった。今後は、より幅広い大学や学科、専攻に通う大学生を対象に検討を進める必要があるだろう。しかし、それを差し引いたとしても、先行研究を支持する結果を複数年にわたる調査方法で明らかにできたことは、今後のキャリア選択自己効力感研究にとって大きな意義があったと言える。そして、本研究では大学受験経験、大学生生活経験とキャリア選択自己効力感、結果期待の関係に注目していたため、例えば、大学受験経験の評価が経年で変化していく可能性や大学生生活経験との交互作用については明らかになっていない。将来的には、「大学受験の努力経験」が低かったり、「受験期不安」が高かったりした場合でも、大学生生活で何らかの活動に積極的に取り組むことでキャリア選択自己効力感の向上に繋がるのか検討を進めたい。

#### 引用文献

- 安達智子（2001）. 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討——教育心理学研究 49（3）, 326-336. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.49.3\\_326](https://doi.org/10.5926/jjep1953.49.3_326)
- 秋山史子（印刷中 a）. 大学受験経験とキャリア選択自己効力感およびキャリア選択結果期待の関係 応用心理学研究
- 秋山史子（印刷中 b）. 大学入学前後の経験とキャリア選択自己効力感および結果期待の関連 人文
- Betz, N. E., & Vuyten, K. K., (1997). Efficacy and outcome expectations influence career exploration and decidedness. *The Career Development Quarterly*, 46（2）, 179-189. <http://dx.doi.org/10.1002/j.2161-0045.1997.tb01004.x>
- 花井洋子（2008）. キャリア選択自己効力感尺度の構成 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究 69, 41-60.
- 川瀬隆千（2017）. 宮崎公立大学学生における進路選択自己効力の向上要因 宮崎公立大学人文学部紀要 24（1）, 17-31.
- 富永美佐子（2008）. 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題 キャリア教育研究 25（2）, 97-111. [https://doi.org/10.20757/jssce.25.2\\_97](https://doi.org/10.20757/jssce.25.2_97)

## Appendix 1 大学生生活経験尺度の項目内容

---

### 学習での努力成功経験

- 私は、真剣に授業を受けている。
- 私は学校の課題を一生懸命に取り組んでいる。
- 私は、大学でよい成績だった。
- 大学での私の成績は悪かった。\*
- 私は大学の試験でよい点数を取った。

### 部活・サークル活動での努力成功経験

- 私は部活動・サークル活動の練習や準備に熱心に取り組んでいる。
- 私は部やサークルの活動を頑張っている。
- 私は部活動・サークル活動の中で、よい評価を得た。
- 私は部活動・サークル活動の練習や試合、発表会などによく参加している。
- 私は部活動・サークル活動で、ある成果を上げた。

### アルバイトでの努力成功経験

- 私はアルバイト中、熱心に仕事をしている。
- 私はアルバイトで、よい仕事が出来た。
- 私はアルバイトを一生懸命頑張っている。
- 私は空いた時間は常にアルバイトをするようにしている。
- 私はアルバイトに注力していない。\*
- 私はアルバイトで、ある成果を上げた。

### 大学外での活動における努力成功経験

- 私は趣味やボランティアなどの学外の活動によく参加している。
- 私は趣味やボランティアなど学外の活動をほとんど行わない。\*
- 私は趣味やボランティアなど学外の活動で成功を取めた。
- 私は趣味やボランティアなどの学外の活動の集まりには、欠かさず参加している。
- 私は趣味やボランティアなど学外の活動でよい評価を得た。
- 私は趣味やボランティアなど学外の活動を頑張っている。
- 私は趣味やボランティアなど学外の活動に熱心ではない。\*
- 私は趣味やボランティアなど学外の活動に一生懸命取り組んでいる。

---

\*逆転項目